

2021年9月5日（日）主日朝礼拝説教

『その人たちの信仰を見て』 井上隆晶牧師
ガラテヤ3章1～10節、マルコ2章1～12節

①【天国はカづくで奪われている】

イエス様が家の中で神様のお話をしていると、四人の男の人が中風で寝たきりの人を床に乗せて運んできました。「中風」とは、脳梗塞などの脳の血管障害の後遺症によって、身体にしびれや麻痺、言語障害などが出る病気です。私の卒論の指導教授の牧師先生も脳梗塞の後遺症で言葉がしゃべられなくなりました。よくしゃべる先生で説教は1時間もされていましたから、何もしゃべれなくなり辛かったと思います。この中風の人はすべての人間の象徴として見ることができます。彼は罪によって体が麻痺し、自分の力で神のもとに行くことができない人間をイメージしています。罪は神に向かって成長する力を奪います。教父たちはこの病人を運んできた四人の男を、四つの福音書になぞらえています。この四つの福音書は、幾世代にわたって多くの人をキリストの元に連れて行ったからです。

ところが家は群衆でいっぱい、イエス様のもとに近づくことができません。そこで屋上に上ってイエス様がおられる辺りの屋根をはがして大きな穴を開け、病人を寝ている床ごと降り降ろしました。何という大胆な行動をするのでしょうか。私はまずこの行動に驚きます。他人の家を壊してまでイエス様の所にこの病人を連れて行きたかったということです。「そこまでするか」と思います。でも聖書の中には「そこまでするか」という人の話で溢れています。ザアカイは背が低かったので先回りしていちじく桑の木に登りイエス様を見ようとしました。悪霊につかれた娘をもつカナンの女性はイエス様が足を止めてくれるまで叫び続けました。出血の止まらない婦人は群衆に紛れ込み、イエス様の衣に触れました。罪深い女の人はイエス様の足元に近づき、涙で足を洗い、髪の毛を解いて拭き、接吻して香油を塗りました。(ルカ7章) みんな「そこまでするか」です。でもイエス様はそこまでする人たちを褒めます。「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい」(ルカ8:48)「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように。」(マタイ15:28)「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」(ルカ8:48)「あなたの罪は赦された」(ルカ7:48)

●昔この教会にうつ病と強迫性障害を患っている信徒さんがおられ、礼拝中によく倒れました。ものすごく力を入れて生きていましたから緊張が切れて倒れるのです。何度も倒れるのでしまいにはみんな慣れてしまい、その人を跨いでは聖餐桌に近づきました。その人も聖餐になると目を覚まし、這って聖卓に近づき聖体を食べると安心してまた気絶するのです。まさに「そこまでするか」です。私も

この礼拝堂を改装したときに、同僚の牧師から言われました。「ここまでするか」。

聖書の中に「天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者たちがそれを奪い取ろうとしている。」(マタイ 11:12)と書かれているのを聞いたことがあるでしょう。彼らはそのような人たちなのです。神の国は「ここまでするか」という人たちに喜んで与えられ、救いは必死に求める者に与えられます。

イエス様はその人たちの信仰を見て、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦される」と言われました。彼らは何も語っていませんが、行動がすべてを語っています。

口でイエス様を信じますというのは簡単です。でも本当に信じているかは行動を見れば分かります。「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」

(ヤコブ 2:17)とヤコブはいいました。信仰と行いは一つです。信仰は行いとなって現れるものです。

●修道者フェオファンは「努力なしには何ももたらされない。神の助けは常に用意され身近にある。しかしそれを求め探す人たち、あらゆる力をその試練に向けて注ぎ、心から『主よ、お助けください』と叫ぶ者たちだけに与えられる。」と述べています。チト・コリヤンデルはこういいます。「信仰は考えることによってではなく、実行することによって得られる。…窓を開けない限り、新鮮な空気は部屋に入らない。日光浴をしない限り肌は黒くならない。信仰を得ることも同様である。ただ楽に腰かけて待っているだけでは、私たちは目標に達することはできない。放蕩息子をまねよう。彼は立って出発した。」

イエス様は行動を見えています。私たちもこの四人に倣い、行いをもってイエス様に近づきましょう。

②【救いと癒しは違う】

では、なぜイエス様は病気を癒してもらいに来た人に、病気の癒しではなく「あなたの罪は赦される」と言われたのでしょうか。それは、それが彼にとってまず一番必要な言葉だったからではないのでしょうか。「罪が赦される」というのは言い換えれば、あなたは神との交わりが回復しましたという意味です。「神にあなたは迎え入れられました。もう裁かれませんかから恐れなくても大丈夫です。自分を責めなくていいのです、自分を赦してあげてください」という意味です。

ところが数人の聖書学者たちがこれを横で聞いていて「神様だけが罪を赦すことができるのに、このイエスという者は何者か、偉そうに自分を神のようにしている。これは神を冒涇した言葉だ」と心の中で思ったのです。そこでイエス様は「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』というのと、『起きて、床を担いで歩け』というのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」(9~10節)と言われ中風の人に「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」というと、病人は病が癒されて起き上がり、すぐに床を担いで出て行きました。この

ように「罪の赦し」の後に、「病気の癒し」が行われています。私たちはこの順序を重んじます。病気の癒しはそれほど重要ではないのです。もし学者さんたちが心の中で疑いを持たなかったら、病気の癒しは行われなかったかもしれないのです。病気の癒しはメインではありません。それは罪が赦され、神との交わりが回復したしるしとして、ある選ばれた人に与えられます。与えられないこともあります。しかし多くの人は教会に癒しを求めてやってきます。そして癒されたらもう教会へは来ません。私はカルトの説得をしています、経験的に100人脱会しても、脱会した後、残って神との交わりを続けるのは10人くらいです。後の人は宗教はこりごりだと言って、もう戻って来ません。聖書の中に10人の重い皮膚病の人が癒された話がありますが、その中の一人だけが自分が癒されたのを知って、神を賛美しながら戻ってきました。イエス様は彼に言われました。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。」そして彼に「あなたの信仰があなたを救った。」(ルカ17:19)といわれました。ここで「あなたは癒された」ではなく「救われた」と言われたことに注意してください。「癒し」と「救い」は違います。多くの人が求めるのは癒しであって、救いではありません。救いとは神との交わりが始まること、神に向き直って生き始めることです。神に向いて生きていなければ、いくら肉体の病が癒されたところで、彼は死んでいるのと同じです。しかし、神に向いて生きている者は、たとえ肉体の病が癒されなくても、生きているのです。

イエス様はその人がどんな罪を犯したのか、内容を問いたしません。そこには興味がないんですね。イエス様が見ておられるのは、その人が自分の所に必死に近づこうとしている姿です。私はいくら問題があっても必死に教会に通い、キリストに必死に祈る人の姿を見る時、安心します。ああこの人は大丈夫だと思えます。神との交わりが回復しているからです。人は神に向かって生きるように創造されていました。その本来の目的に戻っているんですね。皆さんも救われているんです。「どこにいるのか」と問われるキリストに対し「ここにいます」と答えましょう。

③【神は本当に人の中にやってきて人を救われた～復活の予兆～】

最後に「あなたの罪は赦される」というのと、「起きて、床を担いで歩け」というのと、どちらが易しいか」という言葉の意味を考えてみましょう。普通に考えると罪が赦されると言うことよりも、実際に病気を癒すことの方が難しいのです。ユダヤ人は病気と罪を関係づけて考えていました。そこでイエス様は彼らの考え方に合わせてやったのだと思います。罪があるから病気になるなら、病気が治るということは罪が赦されたということのしるしになります。そしてイエス様は罪を取り除くことが出来る方であるという証明になるのです。より難しい事をすることによって、より簡単なことを証明するのです。私はここを読んで、これはイエス様の復活により、人の罪が赦されることの前兆、ひな形だと思えました。罪があるから死ぬわけです。復活する(死なない)ということは罪がないことにな

ります。罪を赦すことは簡単なことです。もっと難しいのは人を復活させること、永遠に生きる者とさせることです。これこそキリストが来た目的です。イエス様の言葉にはこれから行おうとしている大変難しい、救いの業に対する覚悟が感じられるのです。

●雨宮神父がこんなことを書いています。「『いかに幸いなことでしょうか。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。いかに幸いなことでしょうか。主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。』(詩編 32:1~2)「赦され、覆っていただき、数えられず」いずれも受身の動詞が使われています。人間はゆがんだ行為を、自分の力ではどうすることもできない。神様が介入し、赦し、覆い、数えない、ということがあって初めて罪の問題は解決するのだ、と捉えられているのだと思います。」

マタイ福音書では「群衆はこれを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの權威をゆだねられた神を賛美した。」(マタイ 9:8)と書かれ、ルカ福音書は「人々は…恐れに打たれて、今日は驚くべきことを見た、と言った。」と書いています。人々がこの癒しを見て「恐ろしくなった」のは、そこに神を見たからなのではないのでしょうか。地上に降りてきた神、罪人の間に入って来られた神を見たということだと思うのです。人の罪を赦し、罪を覆い、罪を数えられないばかりか、人を癒し、病と死から起き上がらせる神を見たからだと思うのです。人の崩壊を止めてくれるのは神から遣わされた救い主、神の子キリストだけなのです。この方が来て下さらなければ私たちの罪と死の問題は解決しなかったのです。

私は先週の岸本光子先生の話聞いて思ったのです。Aさんは洗礼は受けませんでした。神様は確かに彼女に働いてくださいました。神はすべての人を照らし、働いてくださいます。そしてぶどう園の労働者の譬えを思い出したのです。朝 9時から働いた人も、5時から働いた人にも同じ賃金をくださる。この世で多く悟った人にも、僅かしか悟れなかった人にも、多く働いた人にも、そうでない人も、さなぎが蝶に生まれ変わる時のように、すべてこの世の苦しみはどろどろに溶け去り、リセットされて新しくなり、来世では新しい命と体をもらえるのだと、神の神秘的な偉大な力がすべての人の上に働いてそれが行われるのだと思いました。その神の業を私たちも楽しみにしたいのです。恐れに打たれるほど神の愛と神の誠実さを感じ、驚くべきことを見たいのです。